

高校の教科書

2023. 8. 24

この前、私のところに、「高等学校 現代の国語」というものが届いた。高校1年生の国語の教科書である。この教科書の持ち主は、いわゆる進学校に通う高校2年生である。本校の卒業生である。届けてくれたのは、お母さんである。

7月5日に出された「校長室だより～燦燦～ No. 7 8 6 高校の先生」に、次の一節がある。「漢字はどんどん出てこなくなっているし、短期記憶力も落ちているし、そろそろ高校の教科書でも読んでみようかと思う。もともと小説は好きだが評論や随想が好きなのである。」

これを読んで、届けてくれたのである。親子で毎日この校長室だよりを読んでいただいている。ありがたい。お母さんから、本人からのメッセージを預かった。「『羅生門』がいいです。それと『水の東西』もいいです。ぜひ読んでください」とのことだった。この2つの作品には、付箋紙が貼ってあった。この2作品を推してくれたことに感心した。どちらも高校国語教科書の定番教材とも言える作品である。これらのよさを理解したということであろう。それがうれしかった。

早速、久しぶりに読んでみた。まず『羅生門』を読んだ。芥川龍之介の作品である。芥川の叙述の妙はすごかった。改めて、芥川の神髄を見た。その一方で、ざわざわとした。寒気もした。胸が締めつけられた。以前、読んだときには、こんなことはなかったと記憶している。後味が悪かった。読後感が、すこぶるよくない。だが、考えさせられたことは確かである。

この教科書の持ち主は、私が教科書を返すときには、自分が学校に来ると言っていたそうである。実際に、お母さんと一緒に来てくれた。遠い記憶だが、私が高校生のときに、この作品を読んだときには、教科書にある芥川龍之介の有名な作品、映画化もされた作品、勉強しなければならないものという意識だったと思う。読むのは当たり前であり義務のようなものという認識である。数年前に読んだときは、高校の先生が授業をしなければならない作品として読んだ。今回はというと、一読者として読んだ。そうしたら、大変なことになった。この作品がもつ威力をまともに受けてしまった。教科書の持ち主である高校生は、どのように読み、何を感じ、どんなことを考えたのだろう。

次は、『水の東西』である。山崎正和の評論である。やはり、私は評論が好きである。こちらは、読後感がよい。文中にローマ郊外のエステ家の別荘が出てくる。教科書には、ここの噴水の写真が4枚出ている。実際に見たことがある。ヨーロッパの噴水文化の典型である。どうだ、これでもかというほどの噴水の数である。しかけもすごい。いったい、どうやって造ったのだろうと思わずにはいられない。一方、日本の庭園や鹿おどしは、対極をなすものである。一言でいえば、文化の違いである。この教科書の持ち主は、きっと東西の文化の違いについても考えたことだろう。

お借りした教科書には、授業で使ったとおぼしきワークシートが挟まれてあった。現役高校生である。教科書本文には、たくさんの書き込みもあった。いくつかの色を使い分けて書き込んであった。『羅生門』と『水の東西』の書き込みには、ついつい目がいつてしまう。この後、教科書の他のページも読み始めたのは言うまでもない。